日蓮大聖人御書全集

十字御書（むしもちごしょ）

新版
2036
～
2037

十字御書（むしもちごしょ）

弘安（こうあん）4年（ねん）（'81）1月（がつ）5日（にち）　60歳（さい）　石河能助（いしかわよしすけ）の妻（つま）

十字（むしもち）一百（いっぴゃく）枚　菓子（かし）一籠（いっかご）　かしひとこ、給（たま）び了（おは）わんぬ。

正月（しょうがつ）の一日（ついたち）は、日（ひ）のはじめ（始）、月（つき）の始（はじ）め、としのはじめ（年始）、春（はる）の始（はじ）め。これをもてなす人（ひと）は、月（つき）の西（にし）より東（ひがし）をさしてみつがごとく、日（ひ）の東（ひがし）より西（にし）へわたりてあきらかなるがごとく（渡明）、とくもまさり（徳勝）、人（ひと）にもあいせられ（愛）候（そうろう）なり。

そもそも地獄（じごく）と仏（ほとけ）とはいずれの所（ところ）に候（そうろう）ぞとたずね（尋）候（そうら）えば、あるいは地（ち）の下（した）と申（もう）す経（きょう）もあり、あるいは西方等（さいほうとう）と申（もう）

す経も候。しかれども、委細にたずね候えば、我らが五尺の身の内に候とみえて候。

さもやおぼえ候ことは、我らが心の内に父をあなずり母をおろかにする人は、地獄その人の心の内に候。譬えば、蓮のたねの中に華と菓とのみゆるがごとし。仏と申すことも、我らが心の内におわします。譬えば、石の中に火あり、珠の中に財のあるがごとし。我ら凡夫は、まつげのちかきと虚空のとおきとは見候ことなし。我らが心の内に仏はおわしましけるを知り候わざりけるぞ。

ただし、疑いあることは、「我らは父母の精血変じて人となりて候えば、三毒の根本、姪欲の源なり。いかでか仏はわたらせ給うべき」と疑い候えども、またうちかえしうちかえし案じ候えば、「そのゆわれもや」とおぼえ候。

蓮はきよきもの、泥よりいでたり。せんだんはこうばしき物、大地よりおいたり。さくらはおもしろき物、木の中よりさきいず。ようきひは見めよきもの、下女のはらよりむまれたり。月は山よりいでて山をてらす。

わざわいは口より出でて身をやぶる。さいわいは心より

出　　飾
いでて我をかざる。

今、正月の始めに法華経をくようしまいらせんとおぼし　　思
　　供　養
めす御心は、木より花のさき、池より蓮のつぼみ、雪山の
　　梅　檀　　開
せんだんのひらけ、月の始めて出ずるなるべし。

今、日本国の、法華経をかたきとして、わざわいを千里の　　禍
　　招
外よりまねき出だせり。これをもっておもうに、今また　　思
法華経を信ずる人は、さいわいを万里の外よりあつむべし。　　幸　　集

影は体より生ずるもの。法華経をかたきとする人の国は、　　敵
　　影　　添　　禍
体にかげのそうがごとくわざわい来るべし。法華経を信ずる

人(ひと)は、せんだん梅檀香にこうばしさのそなえたるがごとし。具またま

た申(もう)し候(そうろう)べし。

正月五日(しょうがついつか)

日蓮(にちれん)　花押(かおう)

重須殿(おもんすどの)の女房御返事(にょうぼうごへんじ)